

Residence Patterns of Hunter-gatherers after Settlement Inferred from Individual Migration Histories: The Case of the Baka in Southeastern Cameroon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 彭, 宇潔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009641

個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態

—カメルーン東南部のバカを事例に—

彭 宇 潔*

Residence Patterns of Hunter-gatherers after Settlement Inferred
from Individual Migration Histories:
The Case of the Baka in Southeastern Cameroon

Yujie Peng

本稿の目的はカメルーン東南部の狩猟採集民バカの移動・移住歴を通して、定住化後におけるバカの居住形態の様式を把握したうえ、彼らにとっての移動と移住の意味を明らかにする。本稿は2010年から2019年にかけて断続的にこなった現地調査を通して、カメルーン東部州の5つの村で収集した事例を詳細に記述して分析する。定住化後のバカの居住形態は、近い親族とともに少人数で同じ集落に住むのが基本である。それと同時に、婚姻状態の変化にともなう比較的に長期的な移住が多く見られた。一方、比較的に短期的な移動と移住には夫婦喧嘩や親族訪問などの理由が挙げられる。このような居住と移動には集団内での親族システムと婚姻制度といった社会的規範が強く機能していることが明らかになった。また、定住化後には接触する外部集団が多様化し、労働のための移動や他集団との通婚が増えることによって、比較的短期だが遠方への移住が増える傾向が見られた。これまでの先行研究で重要視されなかった他集団との相互作用による移動の多様化は、特に定住化した狩猟採集民社会で顕著になることが明らかとなった。さらに、それによってバカ及び近隣の各集団においてそれぞれ内部の制度と規範にも変化が生じることが認められた。

This study was conducted to elucidate patterns of residence of Baka hunter-gatherers in southeast Cameroon through their movement and migration histories, and to clarify the importance of migration for them. This paper

* 国立民族学博物館

Key Words : residence pattern, migration, hunter-gatherers, Cameroon, Baka Pygmy

キーワード : 居住形態, 移住, 狩猟採集民, カメルーン, バカ・ピグミー

presents descriptions and analyses of cases collected in five villages in eastern Cameroon through intermittent fieldwork during 2010–2019. The Baka residential patterns after their settlement fundamentally include residence in a camp or village with close relatives and a few others. High incidence of long-term migration occurs because of changes in marital status. However, reasons for short-term movement and migration include marital quarrels and visits to relatives. Social norms such as kinship and marriage systems were found to function strongly through such residence and movement in Baka society. After their settlement in recent times, the numbers of people contacting with outsiders became more diverse. Particularly, people who moved to work and marry with other groups increased. Migration pattern diversification occurring through interactions with other populations, although not emphasized in earlier studies, is especially evident in settled hunter-gatherer associations such as the Baka. Moreover, results revealed that it caused changes in the internal systems and norms in each of the Baka and neighboring groups.

1 序論	5 他の村・地域にみるバカの移住歴
2 調査の概要	5.1 グリベ村
3 調査地詳細	5.2 ブーラーボ村
3.1 背景——カメルーンにおけるバカの定住化（2000 年代まで）	5.3 旧ンガト村
3.2 本研究における調査対象地域の情報	5.4 ロミエ地域モコンゴワヤ村
3.2.1 広域調査の対象地域	6 考察
3.2.2 長期滞在したソン村	6.1 集団内の社会的規範
4 ソン村にみるバカの移住	6.2 集団間の相互作用
4.1 S3 集落	7 結論
4.2 ソン村の他の集落	

1 序論

本稿の目的は、現代の狩猟採集社会、またはポスト狩猟採集社会における居住形態に影響を及ぼす短期的な社会的要因を明らかにし、それが中長期的な移動とどのような関係にあるかを考察することである。具体的には、カメルーン南東部

のバカ (Baka) の社会の居住と移動の具体的な様相とその社会的な要因を、筆者のフィールドワークで得られたデータに基づいて示す。次に、集団内と集団間に分けて、居住様式に影響を与えている社会的要因を明らかにする。その上で、居住様式の変化を中長期的、短期的に考えた場合の、短期的に発生する社会的要因の性質について考察する。

これまでの狩猟採集民研究で、「移動性 (mobility)」は主要な課題の一つであり続けてきた。狩猟採集民に関する通文化的研究や考古学的モデルは主として生態学的アプローチによるもので、ある環境において集団を維持できる人間の最大量、すなわち環境収容力に基づいて引き出されており、進化論的な説明であった。例えば Robert Kelly (ロバート・ケリー) は、遊動的か定住的かにかかわらず、狩猟と採集に依存して生活している人々を狩猟採集民として分析の対象とし、通文化研究的な視点から狩猟採集民の居住—移動モデルの構築を試みている (Kelly 2013)。

一方で、社会的・文化的要因を考慮しながら狩猟採集民の移動を定量的に分析した初期の研究としては、Hewlett (ヒューレット) らの論考が挙げられる。中央アフリカのピグミー系狩猟採集民アカの移動は、結婚や交易などの社会的な原因での移動が狩猟採集などの生業活動をするための移動より頻繁であり、移動先までの距離もより長い (Hewlett et al. 1982)。そして、狩猟採集民の移動に関する比較研究によると、男性の移動距離が女性のそれより長いなどの傾向が見られる (MacDonald and Hewlett 1999)、といった集団内の社会的規範に着目した研究の成果がある。

これらの研究の共通した特徴は、比較的短期間に見られる居住性を考察している点にある。すなわち、集団を取り巻く自然環境や社会環境が変化したことへの反応として移動性を明らかにしようとしているといってもよい。こうした短期間における移動性に対し、考古学やエスノヒストリーといった分野では、中長期的な視点から移動性を考える必要があることが指摘されてきた。例えばアフリカ南部乾燥地域のブッシュマンは、これまで 70 年の間に、ブッシュマンだけの狩猟採集遊動型、ブッシュマンと農牧民が混住する農牧型、ブッシュマンと農牧民が混住する学校病院型 (開発的)、そしてブッシュマンと農牧民が混住する農耕労働型 (出稼ぎ的) という変遷があった (Ikeya 2018)。

これらの先行研究を踏まえると、狩猟採集民の居住—移動パターンは、比較的

短期間に生じる生態学的、社会的環境の変化だけでなく、数十年から数百年単位での変化を理解することが重要であると言える。一方で、数十年から数百年単位での変化は、数年単位で生じる変化の蓄積でもあることから、短期間における変化と中長期間に生じる変化との関係を考察することが求められる。また、移動の要因は確かに自然環境への適応という生態学的な背景によってある程度は説明されるものの、彼らの集団内の規範などの社会的な要因も移動や移住に作用している可能性は否定できない。むしろそこには、移動や移住に関わる社会的な規則や社会関係、居住様式が作られてきたと言ってもよいかもしれない。そこで、本稿では短期的な社会的要因について自らのフィールドワークに基づいて解明したうえで、中長期的な移動にどのように作用するかを示す。

本稿の調査対象であるバカに関しては、1990 年代にコンゴ共和国北部で調査した佐藤は 15 のバカの集落に対して居住様式を調べた (Sato 1992)。すべての集落について、夫の親族の近くに居住する夫方居住がほとんどである (Sato 1992: 211)。また、人口の 43.3 パーセントは調査地域外からの移住者であって、移住者の男女比率は半々である。集落単位での移住に関しては、新たな家屋を建てること、または成員の死亡が主な理由として挙げられているが、個人レベルにおける移住の理由や集落内における構成員の関係についてはほとんど言及されていない。それに対して、松浦 (2012) は具体的な移動・移住の理由について報告した。定住化したバカ (カメルーン) とバボンゴ (ガボン) の 2 つのピグミー集団に対する調査を通して、個人の訪問活動はほとんど、婚出した女性たちが出身地に戻るといった親族内訪問であった。それ以外の訪問者は、民俗医療や猟具の貸出を依頼する商取引や生業活動、儀礼への参加などを目的とする人々である (松浦 2012)。バカたちの訪問活動 (一時的移動) はほとんど「家族内の訪問者」によるもの (73 パーセント) だった。一方、バボンゴの訪問活動は葬式への参加が一番多く、親族や姻族への訪問はそれに次ぐものの少数である。

上記の先行研究は、ピグミー系狩猟採集民集団を対象に、彼らの集落構成の特徴や集落間におけるメンバーの移動の特徴、それに構成と移動を制約する規範をまとめているものである。それに、そうした居住形態の特徴と規範はいずれも彼らの親族システムに深くかかわっていることがわかった。2000 年代以降でも同じ特徴と規範なのか、新たな特徴や傾向が生じたか否かを確認する必要がある。さ

らに、上記の先行研究はすべて「ある時点のある場所」といった短期間で定点観察という形の民族誌であり、本稿の序論で提起した短期間と中長期間の移動要因の関連性について議論されていない。

2 調査の概要

筆者は2010年から2019年にかけて、カメルーン東部州でフィールドワークを実施した。2010年から2017年の間、ブンバ・バック国立公園の周辺地域において合計約14ヶ月の現地調査を行った。本稿ではこの調査から得られたデータに基づき、バカの親族システム、居住と移動、およびそれらに関わる社会的要因について具体的な事例を紹介する。本研究の調査対象地域は、図1に示したように、すでに述べた一番南西にある旧ンガト村を含め、そこから東北にかけて道路沿いに点在するズーラボ村（以下ズーラーボ村と記す）、マレア・アンシャン村（以下マレア村と記す）、ソン・アンシャン村（以下ソン村と記す）、グリベ村である。

3つのバカの集落を含むソン村では、2010年から2017年にかけて断続的に長期的なフィールドワークを実施した。基本的には図2のS3集落に住み込み、合計約12か月をかけて集落の成員たちの日常生活を参与観察した。S3集落に滞在していた期間中に、他の2集落にも頻繁に訪問し、その成員と行動をともにしていた。また定期的にソン村中心部に住む農耕民コナンベンベのところを訪れ、そこで労働するバカと農耕民を観察し、フォーマルおよびインフォーマルな聞き取りを行った。

長期的な参与観察とは別に、筆者はその他の複数の村と地域にわたる聞き取り調査も実施した。2017年8月に1週間程度、図1のマレア村（1集落）、ズーラーボ村（3集落）と旧ンガト村（2集落）を訪問して、当時そこに居住・滞在していたバカたちを対象に世帯調査および親族名称の確認を実施した。新旧ンガト地域以外に、2018年12月から2019年1月にかけての2週間と、2019年8月から9月までの3週間、ロミエ地域にあるバカの2集落において、フィールドワークを実施し、人々の社会的関係と個人の移住歴について聞き取り調査で確認した。調査実施の当時はちょうど野生果実の採集時期であったため、バカたちは大半が森に行き、採集キャンプを作って果実の採集作業に従事していた。こうした事情で幹



図1 本稿の事例に関わる場所 (OpenstreetMap を利用して筆者作成)

線道路沿いの定住集落の人口が少なかったゆえに、これらの3つの村で聞き取った事例は量的なバランスに欠けており、よって本稿では統計的な分析を行わない。そのかわりに、成員が比較的そろって筆者の調査期間の長いシン村で聞き取った集落の成員と個人の移住歴を第4章で詳細に記述して、それに加えたシン村以外の村で詳しく聞き取れた移動・移住歴を第5章で記述する。

3 調査地詳細

3.1 背景——カメルーンにおけるバカの定住化（2000年代まで）

筆者は2010年に初めてカメルーンに渡航してバカに対する調査を開始したため、先行研究の調査時期と比べて調査対象の社会的環境が大きく変わっている。1990年代以降のバカはすでに定住化していたため、筆者が自らの調査によって得たデータは定住生活に定着したバカの生活を理解する材料になる。しかし、バカの定住化後の移動性を議論するには、現在の様子だけではなく彼らが経験した社会的背景の変化についても記述しなくてはならない。とりわけ、彼らがどのよう

なプロセスで、森での狩猟採集を主な生業活動とする遊動生活から農耕をしながらの道路沿いでの定住生活に移行したのか、一度振り返って関連する先行研究を時間軸で整理する必要がある。

バカは数百年前からすでに農耕民との接触を始めていたと言われている (Bahuchet 1993)。服部が筆者と同じ地域で実施した聞き取り調査の結果によると、奴隷を求める商人から逃れるために、現在の中央アフリカ共和国に当たる地域からカメルーンなどの新たな地域にやって来て、そこの農耕民と出会った (服部 2010: 184)。それは個人に対する聞き取り調査であったため、カメルーンで生活しているバカ全体の歴史を代表できるものではないが、一部のバカの歴史を窺えるものだと考えられる。その時から 1950 年代まで、バカは自分の畑を持っていなかったが、森林産物の交換や農作業の手伝いを通して、農耕民から農作物や鉄製品を得るという形で生態的・経済的な相互依存関係を持ちつづけた (Althabe 1965)。当時、バカは森で狩猟採集をする遊動生活をしており、農耕民は森の中で集落を作って農耕生活をしていた。1935 年ごろ植民地政府によって、森林地域に住む狩猟採集民と農耕民を対象に、道路沿いへの定住化政策が開始される。その結果、1950 年代以降、農耕民は早々に定住化したが、バカにはそれほど効果がなく、森で遊動しながら狩猟採集をする生活は依然として続いていたと言われている (服部 2010: 184)。しかし、まったく変化がないのではなく、バカたちは自分の畑を徐々に持ち始め、また北部から来るハウサ系商人などの新たな外部者との接触も増えた (北西 2003)。さらに時代が下って 1960 年のカメルーン独立後も、定住化政策は続けられていた。1970 年代には、新政府と対立した左翼反乱軍がバカの暮らす東南部の森を拠点にしていたため、森にいる者がすべて反乱軍とみなされてしまう。そのためバカは政府からの制圧を恐れ、森を出て村に住み始めたそうである (服部 2010: 184)。

村に住み始めて少量の畑を持つという変化があっても、バカは森で遊動しながら狩猟採集をする生活に重心を置いていた。その理由として、バカにとって、即時的収益システム (狩猟採集) から遅延的収益 (農耕) へ移行することはとても困難なことだと北西は指摘している (北西 2002: 60)。1990 年代に行われた政府による農耕の指導あるいは強制はバカの農耕化に大きな効果があり、バカの生活に、それほど手入れのいらぬバナナとキャッサバの栽培が定着した (北西 2002)。ま

た農耕化と並行して、外部者との接触によって、バカの日常において貨幣を利用する場面が増加し、森林産物や農作物、労働力（出稼ぎ）が彼らの現金収入の手段になった（北西 2003）。

一方で、森林資源へのアクセスに関する国の動きも数多くあった。1992 年の地球サミットでの「生物多様性条約」への署名によって、カメルーン政府は領土の 30 パーセントを生物多様性保護区にすることを約束した。1995 年から東部州で自然保護区などの設置の準備が始まり、2005 年までに 3 つの国立公園、10 のスポーツハンティングゾーンおよびその周辺の 22 個の伐採区ができた（Njounan Tegomo et al. 2012）。そこはもちろんバカの居住地域でもある。2000 年代には、バカの活動領域は定住する村から森林地域の奥の平均 9 キロメートルまでの範囲内になり（Njounan Tegomo et al. 2012: 53）、国立公園の奥まで行くことは禁じられ、狩猟にかかわる規制も増えた（服部 2012: 178–185）。また 2000 年代以降には、農耕民におけるカカオ畑の拡大とともに、カメルーン東南部の一部の地域でバカもカカオ栽培に盛んに参加するようになった（北西 2019）。このように、バカの社会的環境は大きく変化して、1950 年代以前の森で移動しながら狩猟採集をするという遊動生活から、現在の道路沿いに家屋を建てて農耕と狩猟採集をともに行う定住化生活に移行した。

バカの定住化過程に関してはこれまでほとんど系統的になされておらず、それに関する概覧も確実な証拠として使えるものではないが、民族誌から収集した断片的な情報から、当時の様子が推測できる。そういったものも含めて、これらの記述は、中長期におけるバカたちの居住と移動が外部の集団との接触にも多少影響されていることを示唆した。

3.2 本研究における調査対象地域の情報

3.2.1 広域調査の対象地域

本研究ではカメルーン東部州ブンバ・ベック国立公園の周辺地域を調査対象とする。この地域には、新ンガト村から西南方向の旧ンガト村までを走る幹線道路がある（図 1）。その周辺は、バントゥー系焼畑農耕民のコナンベンベと、定住した狩猟採集民のバカが主な住民となっている。通婚や出稼ぎ、貿易等で人口が流動して、マカ、バンガンド、ムビモなどの農耕民やハウサ商人、バミリケ商人な

どもこの地域に入っている。この地域は、一本の幹線道路がそれぞれ異なる村 (village) という行政単位に分けられている。各村では、バントゥー系農耕民は基本的に自分の土地を持ち、幹線道路沿いに土壁家屋、日干しレンガ家屋、木造家屋などを建てて暮らしているが、流動性の高い商人たちは大きい町と森の奥の村の間を行き来していて、地元の人々から家屋を借りて住んでいる。一方で、この地域のバカたちは、服部が報告したように幹線道路沿いに定住の集落を持ちながら、長期にわたる狩猟や採集のために、森での半定住キャンプ (*peti*) も利用している (服部 2012: 30–36)。バカは、自分たちが住む葉で覆われた伝統的なドーム型小屋「モングル (*mongulu*)」やヤシの葉で覆われた小さい家屋で構成される集落を総じて「バラ (*bala*)」と呼ぶ。それに対して、土壁や日干しレンガ、木材で作られた比較的大きい家屋で作られる農耕民の定住集落を「バ (*gba*)」と呼ぶ。また、バカは幹線道路または農耕民の定住地をつなぐ道も同じく「バ (*gba*)」と呼んでいる。本稿では、バカの居住と移動に関する記述に、バカたちの考え方に寄り添うというイーミックな視点で、以下のように用語を定める。バカの居住について、一番上位になる行政単位の「村」があり、その下位にバカが居住する「定住集落」や「半定住キャンプ」と、農耕民が住む「定住村」が並行してある。本稿の中では、バカの「定住集落」と「半定住キャンプ」を区別せずに「集落」と呼ぶ場合もある。また、互いに何らかのつながりを持っている複数の村がある。「地域」は、村のさらに上位にあるとする。

新旧ンガト地域の一番西側にある旧ンガト村より西へ進むと、森林で伐採を行う木材会社が作った伐採用道路があり、そこから約 80 キロメートルの道路沿いに無人区が広がる。その無人区を抜けて、さらにメソック地域を抜けるとロミエ地域に出る (図 2)。ロミエ地域はロミエと呼ばれる町およびその周辺の人口が密集しているところを指す。ロミエ地域には農耕民と狩猟採集民以外に、商人や伐採関係者、ホテルやレストラン経営者、観光客など、いわゆる森林地域以外のところから来た外部者が非常に多い。これは東部州の東側にあるヨカドマおよびその周辺 (以下「ヨカドマ地域」と呼ぶ) に匹敵する規模である。空間的分布から見ると、ロミエ地域はロミエ中心市場を中心として四方八方に発散していくように定住人口およびその家屋、畑などが広がっていく。それに対して、新旧ンガト地域は一本の幹線道路に沿って定住人口とその家屋が分布して、畑は道路の両側か



図2 調査を実施した地域（筆者が収集したデータに基づいて筆者作成）

ら森林へと広がって分布するイメージである。

3.2.2 長期滞在したソン村

筆者は2010年から2017年にかけて合計約12ヶ月、新旧ンガト地域のソン村に滞在して参与観察を実施した。その7年間に見られたソン村の変化について記述する。2010年の初めてのフィールドワークでは、ソン村へのアクセスは非常に不便であった。新ンガトから20キロメートルくらい離れているグリベ村までの道は、まだ小さいバスが通れるくらいの幅があった。しかし、グリベ村からソン村、マレア村などに行くための唯一の道はモーターバイクでもギリギリ走れる程度の悪道であった。グリベ村からさらに離れたところのソン村やマレア村に行く人々は、バイクが徒歩という2つの手段しかなかった。当時のソン村には、南側の道路沿いに居住するバカたちの集落は最初2つしか存在せず、うち1つは農耕民コナンペンベと混じって居住する小さい定住村であった。図2のS1集落の成員たちは、筆者が滞在した最初の1ヶ月はまだ森の中の半定住キャンプにいて、S2集落の成員たちはまだ全員マレア村から移住してきていなかった。筆者がソン村を出た3ヶ月後の時点でも、道路沿いに定住集落を新たに拓いたS1とS2集落には人数がまだ少なかった。

2011年8月と10月から12月の4ヶ月間では、道路沿いに点在する3集落それぞれに家屋が建てられた。その年、グリベ村からソン村までの道は、新たな伐採事業が始まったため、木材会社によって木材を運送するため整備された。10月にはソン村中心部にあったものの長く停止していた学校も再開されて、バカとコナンベンベの子どもたちは毎日学校に通っていた。S3集落のバカの古老に聞いた話では、「大昔（推測では10年前頃）」そこに学校があったが、その後先生が来なくなって、学校もそれで停止していたという。

しかし、2013年にソン村を訪れると、学校が再び停止していた。学校がない状態は2017年の最後の訪問時でも続いている。2013年はバカの集落そのものにも変化が起きていた。S1集落のククマからは、森で伐採事業者と遭遇してその人々に森から追い出されたという不満を聞いた。そのほか、2011年時点ではソン村の南側にバカのみで構成される集落が3つだけ存在していたが、2013年になるとその数が増えた。コナンベンベと同じ定住村に居住していたバカたちがそのコナンベンベと関係が悪くなったために、S2とS3の間の道路沿いに彼らだけの定住集落を新たに作って居住するようになったのである。ソン村の南側には、空間的に少し距離をおいた5つの集まり（混住村も含めて）に分かれてバカが居住することになった。この状態は2014年まで続いていたが、その後新たな集落に移った人たちはその一部がまたコナンベンベと混住する定住村に戻った。

2017年8月に、2年ぶりにソン村を再訪問したときは、村に驚くほど大きな変化があった。学校は相変わらず停止したままだったが、コミュニティ・フォレスト¹⁾が進んだせいか、村に出入りする外部者が急増していた。外から伐採の仕事に来た労働者たちが中期的に滞在できるように、あるいは木材を運送するトラック運転手たちが一泊できるように、村の中心部に宿泊施設や個人経営の飲食店が数軒できた。それを見た筆者は、2010年にソン村を訪れた初日の夜に泊まるころがなくて、村中心部にある半露天の集会所にテントを張って周りのヤギにぶつかられながら寝ていたことを思い出して、何とも言えない衝撃を受けた。木材会社は一般に伐採業を行う際、村の境界内の森林で木材を採る代わりに、その見返りとして住民たちに木材で家屋を建てて寄贈していた。もちろんこの村のバカたちにもそうした家屋が贈られていた。外部から移ってきた人が増えるにつれて、小売店を経営するハウサ系商人も増え、小売店は以前の1軒から3軒まで増えた。

コナンベンベたちはカカオ栽培のほか、伐採事業への参加や、宿泊施設や飲食店の経営などで現金収入が増えたせいか、ほぼすべての世帯主がモーターバイクを持っていて、自動車を買った人も現れた。それで大きい町へのアクセスが以前よりだいぶ改善し、コナンベンベたちは自分の子どもを学校のある村に送って、そこで学校教育を受けさせているということだった。ただ、車やバイクを持たないバカの子どもたちは学校に行く方法を持たず、農耕民に依頼された狩猟採集や家での家事をするような、見た目には以前と変わらない生活を送っていた。それ以外に、森の景観も変わった。以前バカたちが日帰りの狩猟採集をしていた森には、蜘蛛の巣のように伐採道が広がっている。筆者がバカたちと採集に出かけたときは、自分がいったい森を歩いているのか、それとも幹線道路を散歩しながら葉っぱを採集しているのか、よくわからないくらいの変化だった。

4 ソン村にみるバカの移住

第2章で述べたように、カメルーンのバカは基本的に定住政策にしたがって村という行政単位に一定の人口規模で集まり、焼畑農耕民や商人などとともに道路沿いにまとまって居住している。調査地周辺では、人口は村によって異なるものの、平均的な数は数百人程度である。後ほど詳しく説明するように、バカたちは同じ村に定住していても、数十人単位のいくつかの小さい集落に分かれて、集落の間に物理的に一定の距離をおいて暮らしている。各定住集落には「ククマ (*kukuma*)」²⁾ と呼ばれる男性がいる。その男性または彼の父親（あるいは父親の父親）はその集落を作った人物である。集落のククマは村の村長に相当する人物であり、集落の中心人物だと言っている。本章においては、ソン村を事例に、互いに近接して居住している人々の社会関係、特に親族関係がどうなっているのかを明らかにしたうえで、そこで観察した個人の移住事例を紹介する。

4.1 S3 集落

前述したようにバカは一箇所にとどまらず生活を送っているため、集落の成員が常に安定していることはない。そのため、集落の成員に見られる社会関係を静的に捉えることが非常に難しい。そのために、ある時点での構成員について記述

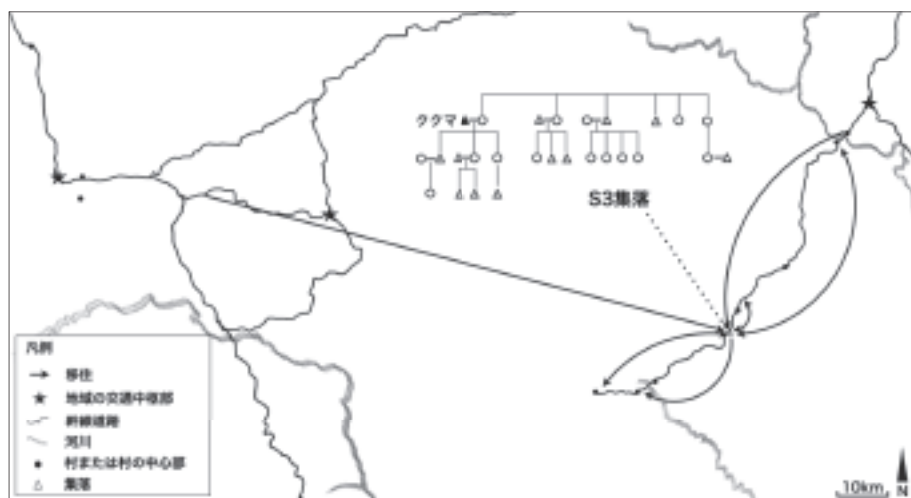


図3 S3 集落の成員間関係及び結婚による移住³⁾ (筆者作成)

することにする。ここではまず、筆者がこれまで長期のフィールドワークを実施したソン村南側の S3 集落を事例に、それらを 2011 年 10 月に調査した時点でのデータを用いて構成を説明する。

S3 集落は、筆者が 2010 年から現在まで長期的に住み込み参与観察を実施した集落である。集落のククマはソン村北側の集落出身で、ソン村南側の集落出身の女性と結婚して、その後 S3 集落を作った。そこに、ククマの妻の姉妹と兄弟およびその子どもたちの世帯が居住している。

事例① S3 集落・女性 M (60 代)

M はソン村南側の出身で、最初はソン村の北側の集落の男性と結婚した。そこで 3 人の子どもを産んだ後、その男性と離婚して、彼の実の弟と結婚した。その弟はもともと M の妹と結婚していたが、離婚して M と結婚した。そうした一連の離婚と結婚を経て、M は元夫の集落から出て、新しい配偶者、長女、次女と一緒に M の出身地ソン村の南側に行き、現在の S3 集落を作った。一方、元夫は M の妹と長男と一緒にグリベ村に移住した。筆者が 2010 年に調査を始めた時点では、M と 2 番目の夫との間に生まれた男女 2 人の子どもはどちらも結婚して出産もしていた。息子の方は配偶者の出身集落に移住した。一方、最後に生まれた娘

(女性 B) はグリベ村よりも遠いビワラ村の男性と結婚してそこに移住したが、出産してすぐに子どもを連れてソン村 S3 集落に一時的に戻った。また 2017 年に筆者が集落を再訪問した時、M の 2 番目の夫が 2016 年に亡くなったと聞いた。

筆者の調査期間中に M は基本 S3 にいるが、2010 年にグリベ村 K 集落に親族の葬式があったため、3 日間程度 K 集落に行った。また、2013 年に筆者がグリベ村 K 集落に滞在している時期に、M は当時の夫と一緒に K 集落の息子家（筆者の滞在先）に訪問して、その日のうちにソン村に帰った。

事例② S3 集落・男性 D (60 代)

男性 D は女性 M の兄弟であり、ソン村南側のバカの集落で生まれた。大人になってからはマレア村の女性と結婚した。2010 年 10 月から 12 月までの筆者の滞在期間中、D は S3 集落に居住していたが、彼の妻はマレア村に居たと聞いた。11 月ごろに、若い女性が小さい女の子を連れてマレア村から S3 集落に訪れた。彼女は D の若い妻だという。つまり、最初に挙げた妻のほかに、この若い女性ももう 1 人の妻として持っているわけである。しかし、どちらの妻も S3 ではなくマレア村に居住していると聞いた。その後、2011 年 8 月と 10 月から 12 月までに、筆者は再び S3 集落に滞在していた。その期間中、S3 集落の成員たちは 8 月には森の採集キャンプに居て、10 月から 12 月までの間は幹線道路沿いの定住集落に移って暮らしていた。D はいずれの時期にも S3 に居住していた。8 月に採集キャンプに居た間は、D の息子（当時は 10 代後半の年頃であった）が妹（つまり D の娘、当時は 10 歳前後）と自身の結婚相手である若い女性を連れてキャンプ地を訪れた。その息子は、結婚のことを自分のお父さんに知らせたいからやってきたと説明した。筆者は 8 月下旬にそこから出て別の地域に行った。10 月に再びソン村に戻った時には、S3 集落の成員たちは全員森から帰ってきていたが、8 月に来ていた D の息子とその結婚相手はマレア村に帰っていた。息子と一緒に来た小さい妹（D の娘）だけは残った。ただし、その期間中に D はよく 1 人で森に入って数日も帰ってこないということがよくあって、S3 集落の人々に「彼の心が病んだ」、「1 人で森で寝るのはおかしい」などと言われていた。2013 年の 8 月から 9 月までの筆者の 3 回目の滞在では、筆者は期間中ずっと定住集落にいたが、D はその時すでにマレア村に行ったと聞いた。また、次の 2014 年 8 月から 9 月までの

滞在では、筆者は S3 集落の成員たちと森の採集キャンプで行動しており、その時に D が小さい娘と一緒に居たのを確認した。しかし、D が 9 月 3 日に突然娘を連れてそのキャンプを去った。その行動に対して、キャンプの人々は「挨拶もせず黙って去るのはよくない」と文句を言っていた。D が去る理由は誰も知らなかったが、彼はどこに行ったかをキャンプの人に尋ねてみたら、おそらくマレア村に帰ったといわれた。その後に再度 S3 集落を訪問したのは 2017 年 9 月で、筆者は成員たちと森の採集キャンプに滞在していた。D は最初そこに居なかったため、彼の行方を成員たちに尋ねた。彼は長い間 S3 集落に居住しておらず、完全にマレア村に移ったと言われた。しかし、筆者が滞在していた期間中に、D が妻（年上の方）と孫と一緒にキャンプの近くの森で S3 集落の成員と偶然出会ったことがあり、そのついでに数日 S3 集落の成員たちの採集キャンプに滞在していた。

事例③ S3 集落・女性 S（30 代）

女性 S はロミエ地域の出身だが、S3 集落出身の男性と結婚して S3 集落に移住した。その男性は女性 M の弟である。男性は昔、他に妻があったが、離婚してから S と結婚した。2010 年に調査を始めた時点では、その夫婦には 5 人の子ども（女 4 人、男 1 人）があり、男の子（当時 5 歳前後）は S の両親のところ（ロミエ地域）にいた。2011 年 12 月ごろに、S と夫は子どもを連れてロミエ地域の出身地に 1 ヶ月以上帰省していた。2014 年に S の夫が亡くなった後、S の姉がロミエ地域からやってきて、もし M が S にいい男（新しい夫）を紹介しなかったら S と子どもたちを連れて出身地に帰ると言った。その当時、M の息子（2 番目の夫との間に誕生）は S と結婚の相談をしていた。しかし、いろいろな理由で S は M の息子を気に入らず、結婚を断った。その後 2017 年に筆者が S3 集落を再度訪問した時、S は M の他の息子（最初の夫との間に誕生）と結婚したことがわかった。この S の 2 番目の夫はもともとグリベ村で結婚して暮らしていたが、S と結婚するため第一夫人と離れてソン村 S3 集落に移住した。ただ、これからグリベ村に戻ることもあると言っていた。また、S の元夫との子どもたちは氏族が実際の父親と同じままであり、2 番目の父は彼らにとっていこのような関係だったが、母親との結婚によってその人を「お父さん」と呼ぶようになった。

事例④ S3 集落・女性 B (20 代)

若い女性 B は女性 M の子どもである。B は最初、ソン村北側に約 80 キロメートル離れたビワラ村の男性と結婚してそこに移住していた。1 人障害児を生んだが、その後夫との関係が悪くなって、2010 年から 2011 年の間頻繁にソン村 S3 集落に帰っていた。それから完全に S3 集落に居住するようになって、そのまま夫と離婚した。2017 年に再度訪問した時には、L はソン村のコナンベンベ農耕民男性と結婚しており、B はソン村に出稼ぎに来たバミリケ男性と結婚していた。しかし、B も L も年配である M の日常生活をサポートしているため、2 人は夫のところに行かず、逆に 2 人の夫が S3 集落に居住することになった。

事例⑤ S3 集落・男性 20 代

男性はビワラ村の出身で、S3 集落の女性と結婚したため、S3 集落に移住した。2011 年に彼と妻はビワラ村農耕民の仕事のために、子どもを連れて行ったと聞いた。2011 年に筆者が滞在していた 5 ヶ月余は、彼らは戻ってこなかった。2013 年、2014 年、2017 年には彼らは S3 集落に居た。ビワラ村の農耕民たちはとても悪いから二度とそこで働きたくないと言っていた。

4.2 ソン村の他の集落

事例⑥ S1 集落・男性 (60 代)

S1 集落はもともとソン村東側の森にあったが、2011 年から徐々に S3 集落より北東方向へ約 500 メートル離れている場所に移るようになった。集落のククマとなる男性はズーラーボ村出身で、ソン村出身の女性と結婚した。ズーラーボ村での生活をやめ、妻と子どもを連れてソン村に移住して S1 集落を作った。同じ集落に、ククマの妻の兄弟やそこ出身の人々も居住している。

事例⑦ S2 集落・男性 (60 代)

S2 集落は S3 集落より北東方向へ約 100 メートル離れている。2011 年にできたばかりの集落で、まだ人数が少なかった。ククマとなる男性はもともとソン村出身の人であるが、マレア村の女性と結婚して長い間マレア村に居住していた。2011 年に妻や子どもを連れてソン村に移住して S2 集落を作った。

事例⑧ S4 集落・集落全員

2017年の調査で、ソン村南側のバカの定住集落地よりさらに南に約10キロメートルの地点に行くと、新しくできた、約2～3世帯で構成されたバカの定住集落があった。彼らはソン村のバカとはなんの親族関係も持っていないが、ソン村南側に居住する農耕民に呼ばれて、ンゴラという新旧ンガト地域以外の村から移住してきたという。この集落のバカたちは彼ら呼んだ農耕民たちの畑を管理する仕事をしている。彼らは畑仕事ばかりではなく、近くの森での狩猟採集もしていると語っていた。S3集落の人たちに彼らの話を聞くと、その森は彼らンゴラ出身者にとって知らないことばかりで、彼らの集落の近くで採集キャンプを作ったS3集落の人々に森の道や資源の位置についてよく聞きに来ていたと言われた。森の資源の位置に関する両者の交流は、筆者もS3集落のメンバーの採集キャンプで観察した。

5 他の村・地域にみるバカの移住歴

筆者はこれまで基本的にソン村で長期的な参与観察を実施してきたが、人の出入りに関して他の集落でも聞き取り調査をした。幹線道路に沿ってソン村より南西方向へ、マレア村、ズーラーボ村、旧ンガト村の間の20～30キロメートルの範囲で計6集落に対して聞き取り調査を実施してきた。各集落での調査の結果、この範囲以上にわたる村の間でのバカたちの移動と移住が頻繁に行われていることが分かった。一方、各村内においては、基本的にバカは常に小規模の人数で集まって、いくつかの集落に分かれて居住している。中にはZ2集落のように、定住政策によってある場所に大人数が集まってできた集中的な定住集落もある。一方で、Z1のような、地理的には間に何もなく、ひとつの集落としてつながっているものの、その中にふたつの別の集落がある事例もある。空間内で家屋が親族関係の近さによってそれぞれ固まって集まり、距離をおいて各自の集落を形成しているである。また、ソン村の3集落のように少人数規模で分散して居住するN1とN2集落のような事例もある。ここでは具体的に、グリベ村、ズーラーボ村と旧ンガト村、ロミエ地域およびそれ以外の地域に分けて、長期観察と聞き取り調査で集めた事例を示す。

5.1 グリベ村

事例⑨ K 集落・男性 40 代

この男性は事例 1 の女性と第一任の夫との息子であって、実の父母の離婚が契機となって父と一緒にグリベ村 K 集落に移住した。彼はそこで第一任妻と結婚して、自分の家屋も数軒建てた。2010 年に筆者がソン村 S3 集落に居たときに、彼はお土産などを持って S3 に 3 日間程度滞在して、自分の母を訪問した。その後も、数回 S3 集落に短期の訪問をしていたという話は、彼の母から聞いた。2017 年に筆者が S3 に居たときは、彼は事例 3 の女性と結婚して、その女性と彼女の子どもたちと一緒に S3 集落に住んでいた。グリベ村の妻をどうするかと聞いたら、彼は第一任の妻を捨ててつもりはなく、今後またグリベ村 K 集落に戻ると答えた。

5.2 ブーラーボ村

ブーラーボ村のバカ集落を 2 つ紹介する。Z1 集落は大きく 2 つの集まりに分けることができる。その 2 つの集まりはそれぞれ兄弟姉妹関係でつながっている。3 世代にまたがって居住していて、家屋も互いに少し距離を置いている。集落の中でも規模の大きい集まり 1 は Z1 集落出身者がほとんどで、それ以外に結婚のためソン村から 3 人が加入した。また、集まり 1 からは旧ンガト村に 2 世帯と 1 人、マレア村に 1 人が移住したことがわかった。一方、人数的に少ない集まり 2 は Z1 集落出身の中高年世代男性が中心となっている。その男性はグリベ村出身の女性と結婚して、自分の集落に移住させてそこで子どもを作ったのである。

事例⑩ Z1 集落・移入した夫婦 60 代

中高年世代の夫婦は夫がグリベ村出身で、前述のグリベ村出身の女性と兄弟である。その妻はソン村出身で、彼らはもともとソン村で暮らしており、そこで子どもも生まれたが、その後、子どもたちをソン村に残して、夫婦だけで Z2 集落に移住した。

事例⑪ Z1 集落・女性 20 代

この女性と初めて会ったのは 2011 年のソン村 S3 集落であった。筆者が S3 に到着したときに、彼女はすでにそこに住んでいた。S3 集落の人に聞いたところ、彼女は本来ソン村のバカ集落の出身で、両親は早くに亡くなっていた。その後母親の姉妹、すなわち事例①の現在 S3 集落の老年女性に育ててもらった。成年後にブーラーボ村の青年と結婚して、結婚相手の居住地に移住した。2011 年に S3 集落に来たのは、事例①の女性を見に来るだけだそうである。ただ、彼女の滞在は 2 ヶ月もわたる比較的長い期間であった。その時、彼女が S3 から出たきっかけは、Z2 村にいる夫が探しに来たからであった。筆者は 2011 年のフィールドワーク以来、彼女は二度と S3 まで来なかったが、2017 年に Z2 集落を訪問したときによく会った。2017 年に彼女に聞いたら、2011 年以降彼女はまた S3 集落に行ったことがないようである。

5.3 旧ンガト村

事例⑫ N1 集落・女性 80 代

旧ンガト村で調査したのは 2 つのバカの集落である。この集落は、一番上の世代の女性がかつてビワラ村の男性と結婚してそこに移住していた。さらにその前、ビワラ村に移住する以前は夫婦で N2 集落に生活しており、その時期に 2 人の子どもを産んで、その後ビワラ村に移住して次の子どもたちを産んだ。その子どもたちもビワラ村で結婚してまた子どもを産んだ。ここから、この 4 世代の人々が長い間ずっとビワラ村に暮らしていたことがわかる。その後、一番上の世代の女性は夫を亡くして、出身地に帰ることを決めた。そこで、母親と一緒に帰る人と、ビワラ村に残る人に分かれた。調査の時点では、一番年上のその女性には同世代の人がいない状況であり、自分の娘たちとその子どもたちに支えられて生活している。

事例⑬ N2 集落・女性 40 代

N2 集落は特に高齢者がおらず、比較的若い集落である。N2 に移住してきた 6 人のうちの 5 人は若い男性たちで、全員ブーラーボ村の出身である。もう 1 人移住してきたのはロミエ地域出身の女性である。その時点では集落を出た人がいな

いように思えたが、実際は、集まり 1 の女性 1 は昔ソン村の男性と結婚してソン村に暮らしており、その男性と離婚した後、出身集落である N2 に帰って現在の夫と結婚した。つまり、結婚のため外に移出したが、離婚のためまた戻ってきたわけである。集まり 1 の一番上の世代の女性は、調査当時にマレア村へ親族訪問（姉のところ）に行っていたため、彼女の世代およびその上の世代のつながりについては聞けず、その 3 つの集まりの間に昔どのようなつながりがあったのか調査できなかった。

事例⑭ N2 集落・男性 20 代

20 代の男性は本来ズーラーボ村 Z2 集落の出身であるが、結婚のため、結婚相手の居住地に移住した。まだ新婚であって、移住も最近 2 ～ 3 年のことであった。Z2 にいる彼の親に聞いた話では、彼はその後ほとんど実家の Z2 に帰ってこないそうである。

5.4 ロミエ地域モコンゴワヤ村

事例⑮ 男性 60 代

ここまではソン村の事例を挙げてきたが、次にロミエ地域の事例を挙げる。筆者は 2018 年 12 月にロミエ地域でバカの移動に関する聞き取り調査と追跡調査を実施した。ここで述べる男性 A の移住史は、聞き取り調査の結果から得られたものである。A はロミエ地域では有名なバカで、白人観光客のツアー案内や研究者の手伝いなどをしばしば頼まれる。A は聞き取り調査の時点で、ロミエ地域シソック村のバカ集落に居住している。彼は、ロミエ地域中心部から北西方向へ約 10 キロ離れたバコムという村の出身である。バコムは彼の父親の出身地でもある。彼は青年時代にバコムよりさらに北側のメンジョという村に行った時、最初の妻と出会ってその後結婚した。結婚した後、彼はしばらくメンジョで暮らしてから、妻を連れてバコムに帰った。しかしその後、彼の父親が亡くなり、母親と一緒に妻を連れて、母親の出身地のロミエ地域シソック村のバカ集落に移住した。その集落に移住した後、彼は第一夫人との婚姻関係を維持したまま、2 番目の妻と結婚した。第二夫人はシソック村のバカ集落出身で、昔結婚したことがあって子どもも 1 人産んでいたが、前の夫と何らかの理由で別れた後、2008 年に A と結婚

した。しかしその後、シソック村の集落の人々との間に揉め事が頻繁に起こり、Aは第二夫人を連れて約6キロ離れたモコンゴワヤ集落に移住した。第一夫人はシソック村の集落に住んだままで、Aは移住した後もシソック村の集落とモコンゴワヤ集落を行き来する。しかし、Aはまた、最近モコンゴワヤ集落での人間関係が嫌になったから他のところに移住したいと話していた。それ以外にも、Aは国際機構のイベントによく参加していて、アボンバンという大きな都市に行った経験がある。

事例⑯ 集団・短期的労働

2013年9月に、ロミエ地域からバカの男性が2人ソン村に来た。その時は新旧ンガト地域、特にソン村にフェケの実 (*Irvingia gabonensis*, ブッシュマンゴーとも) が他の地域より圧倒的に多く実ったため、それを採集する手伝いに地域外から人々が集まった。ロミエのシソック村から来た2人の男性はソン村の村長(コナンベンベ)に呼ばれて来たのだと言った。そのためか、彼らは滞在期間中バカの集落ではなく、村長の家ずっと泊まっていた。採集の仕事が終わると、彼らもすぐロミエ地域に帰った。

6 考察

本稿ではカメルーン東部州、とりわけ新旧ンガト地域を中心に、集落の構成とメンバーの入れ替え、移住パターンに関する事例を個人の移住歴に基づいて紹介した。考察において、彼らの居住・移動と移住の動機または目的に焦点を当てて、これらの事例にもう一度触れながら議論する。具体的には、バカたちの居住および移動と移住の動態を集団内の社会的規範と集団間の相互作用について考察する。

6.1 集団内の社会的規範

表1は第4章と第5章の事例をまとめて、とりわけ、移動・移住先、移動の距離、1ヶ月以上の滞在期間と移動移住の理由に注目して整理したものである。16人の事例においては、1年以上の滞在期間を伴う移住は、総計34回の中で24回(約70.5%)あった。それらの比較的に長期的な移住の理由ときっかけには、調査

対象本人の婚姻状態の変化が 15 回（長期移住の 62.5%）あった。それ以外に、父母の婚姻状態の変化や父母・配偶者との死別による移住が 3 回あって、兄弟と居住するための移住や人間関係の悪化などの理由も見られた。一方で、1 ヶ月以上から 1 年以内の滞在期間を伴う移動・移住には、夫婦喧嘩、出稼ぎ、親族訪問などのより多様な理由が見られたが、特に多く出た理由が見られなかった。移動・移住の距離に関しては、滞在期間の長さとは特別な相関関係が見られないが、比較的短期的で 100 キロメートルを超える移動で出稼ぎを理由に移動したものが目立つ（事例⑧、⑮、⑯）。

集団内の移住を見ると、結婚または婚姻状態の変化は、個人のバカにとって最も大きな要因である。結婚する前に結婚相手を求めるために男性がする移動は、本稿の事例⑤、⑭、⑮の男性からわかる。また先行研究においても、アカ・ピグミーに関する統計的な調査結果に同様の事例が見られる（Hewlett et al. 1982）。結婚後は、女性側が男性側の集落に移住するパターン（事例③、⑬、⑮）だけでなく、女性側に男性が移住するパターンもある（事例①、⑥、⑭）。また、時間軸を長くしてみると、男性側か女性側かに定まらず、一定の期間内（1 年またはそれ以上の期間）にどちらかの側に居住し、その後は逆側に移住する事例も見られる（事例①、②）。それらは個人レベルでいうと、婚姻関係を結んだ双方が互いの関係を維持するための移住である。反対に、ある婚姻が終了した場合、すなわち男女 2 人が離婚する場合、それぞれが自分の出身地または再婚相手のところに移住する事例もあった（事例④）。それは、2 人のある関係の終了または切断によって起きたことで、特定の一つの関係の変化による 2 人に見られる移動の要因といってよいだろう。つまり集団内においては、個人にとって、移住先という場所そのものではなく、特定の個人との関係状態が移住の契機である。そこに居る特定の個人との関係の開始（またはその準備のため）によって一方がもう一方の居住地に移入したり、個人との関係の切断によって一方がもう一方の居住地から移出したりする。そのように 2 人の個人を結んだ関係は結婚が圧倒的に多いと言っている。

結婚のほかに、年配の親の世話をするために、夫婦ともに子どもを連れていずれかの親の居住地へ移住するという、世帯レベル以上の集団的な行動が起きることもある。そうした移住に関しては、事例⑫の N1 集落が挙げられる。ある年配

表 1 本稿の移住事例（筆者作成）

事例	調査実施地	性別	年齢	移動・移住先	距離(km)	滞在期間	理由・きっかけ
①	ソン村 S3	女	60 代	ソン村、村内集落間（位置未確定）	3	1 年以上	結婚
				ソン村、村内集落間（位置未確定）	3	1 年以上	離婚・再婚
②		男	60 代	ソン村→マレア村（集落不明）	20	半年～1 年	妻と住むため
				マレア村（集落不明）→ソン村 S3	20	半年～1 年	不明
				ソン村 S3 →マレア村（集落不明）	20	1 年以上	不明
③	女	30 代	ロミエ地域（村不明）→ソン村 S3	100	1 年以上	結婚	
			ソン村 S3 →ロミエ地域（村不明）→ソン村 S3	100	1 ヶ月～1 年	実家親族の訪問	
④	女	20 代	ソン村 S3 →ビワラ村（集落不明）	80	1 年以上	結婚	
			ビワラ村→ソン村 S3 →ビワラ村	80	2 ヶ月～1 年	夫婦喧嘩	
			ビワラ村→ソン村 S3 →ビワラ村	80	2 ヶ月～1 年	夫婦喧嘩	
			ビワラ村→ソン村 S3 →ビワラ村	80	1 年以上	離婚	
⑤	男	20 代	ビワラ村（集落不明）→ソン村 S3	80	1 年以上	結婚	
			ソン村 S3 →ビワラ村（集落不明）→ソン村 S3	80	3 ヶ月～1 年	農耕民の仕事	
⑥	ソン村 S1	男	60 代	ズーラーボ村（集落不明）→ソン村 S1	45	1 年以上	妻の出身地に移住する
⑦	ソン村 S2	男	60 代	ソン村（集落不明）→マレア村（集落不明）	40	1 年以上	結婚
				マレア村（集落不明）→ソン村 S2	40	1 年以上	出身地に帰る
⑧	ソン村 S4	一集落	10～60代	ンゴラ村（集落不明）→ソン村 S4	80～150	半年以上	農耕民の仕事
⑨	グリベ村 K	男	40 代	ソン村（集落不明）→グリベ村 K	15	1 年以上	父母の離婚
				グリベ村 K →ソン村 S3	15	1 年以上	結婚
⑩	ズーラーボ村 Z1	男	60 代	グリベ村（集落不明）→ソン村（集落不明）	15	1 年以上	結婚
				ソン村（集落不明）→ズーラーボ村 Z1	45	1 年以上	キョウダイの居住地に行く
		女	60 代	ソン村（集落不明）→ズーラーボ村 Z1	45	1 年以上	夫のキョウダイの居住地に行く
⑪		女	20 代	ソン村（集落不明）→ズーラーボ村 Z1	45	1 年以上	結婚
				ズーラーボ村 Z1 →ソン村 S3 →ズーラーボ村 Z1	45	2 ヶ月程度	親族訪問
⑫	旧ンガト村 N1	女	80 代	旧ンガト村 N1 →ビワラ村（集落不明）	130	1 年以上	結婚
				ビワラ村（集落不明）→旧ンガト村 N1	130	1 年以上	夫の死
⑬	旧ンガト村 N2	女	40 代	旧ンガト村 N2 →ソン村 S3	50	1 年以上	結婚
ソン村 S3 →旧ンガト村 N2				50	1 年以上	離婚	
⑭		男	20 代	旧ンガト村、N1 →N2	5	1 年以上	結婚
⑮	ロミエ地域 モコンゴワヤ村	男	60 代	バコム村→メンジョ村	16	1 年以上	結婚
				メンジョ村→シソック村	150	1 年以上	父の死、母の出身地に帰る
				シソック村→モコンゴワヤ村	6	1 年以上	人間関係の悪化
				モコンゴワヤ村→アボンバンモコンゴワヤ村	180	1 ヶ月～半年	国際 NGO のイベント
⑯	ロミエ地域 シソック村	男 2 人	40 代	シソック村→ソン村（村長家）→シソック村	200	1 ヶ月	農耕民の仕事（野生果実の採集）

の女性が夫に死なれて、夫の居住村から移出して自分の出身村に戻った。それと関連して、彼女の子どもの一部が彼女の生活をサポートするために一緒に移ったという、集団レベルの移住も同時にあった。このように、個人間の関係の開始や維持によって、連帯して世代間のような集団内の特定のグループ間関係の変化が生じる場合もある。それらの理由が重なり、二者間から複数人間ないしグループ間の関係に変化が起き、個人レベルの移住と集団レベルの移住が同時に発生したり、地域内の人々の流動が起きたり、居住地（集落）のメンバーが入れ替えたりすることが数年から十数年間というタイムスパンで見えるようになる。

また、1年の間に数回起きるような、移住よりタイムスケールの短い移動についても、本稿で触れた。上記の移住に見られる婚姻関係の変化と親子関係の維持のほかに、近い親族関係に基づいて起きる短期の移動は一般的によく見られるものである。事例③の男性のように、自分の兄弟のところを訪問するための移動や、事例④の女性のように、夫との関係が一時的に悪くなったため実家に帰るという移動がある。本稿ではそのような事例を量的に示していないが、先行研究にはこのような記述および統計的な調査が多数あった（例：MacDonald and Hewlett 1999; 松浦 2012）。また、70年代のムブティにみられた生業活動をするための離合集散（Terashima 1985）や、松浦（2012）が示したバカの訪問の事例もそうした移動に相当すると考えられる。本稿で検討した移動の事例と先行研究で示したデータでは、ピグミー系狩猟採集民集団に見られる居住と移動の様式は、集団内に既存する結婚と出産に基づく親族・姻族関係や生業活動で生じた社会的関係などといった社会的規範に強く影響されていることを示唆した。

6.2 集団間の相互作用

序論でも述べたように、バカは数百年前からすでに、異なる生業形態の他の民族集団と接触していた（Bahuchet 1993）。他の民族集団と交流を続けている以上、バカ（ほかのピグミー系集団も）の移動と移住について集団内の社会的要因のみで考察するのは不十分である。前節で議論したように、集団内でみると、既存する親族システムや生業活動での社会関係などの社会的規範は彼らの居住と移動に影響していると述べた。ところが、そうした社会的規範は、中長期間において他集団との接触によって変化が生じる可能性がある。したがって、ここでは一歩進

めて、バカたちの移動と移住について集団間の相互作用も考慮して議論する。

本稿で挙げた個人の事例からは、他集団の影響による移動が多かった。新たな資源、すなわち現金収入を得るための仕事およびその機会は、彼らが移動する大きな理由である。つまり、なんらかの資源を求めるための移動であるが、集団外部の誰かにである。事例⑮に挙げた男性 A の大きい町でのプロジェクトへの参加もそうした移動にあたり、ソン村の農耕民に呼ばれてきたロミエ地域の男性たちもまた該当する（事例⑯）。またそれ以外にも、第 2 章で少し触れたカカオ栽培もバカの移動に影響を及ぼした。カカオ栽培は、本稿の調査地域ではバカによる栽培の拡大自体はそれほど見られなかった。一方で、農耕民たちにおいては、1960 年代から 1990 年代までは畑に使われた土地の増加が緩やかだったが、1990 年代から 2000 年にかけては畑にされた土地が急増した（Hirai 2014: 178, Fig. 3）。その理由は、1990 年代からカカオの価格が高騰したことだった（Hirai 2014: 195）。農耕民にとって、カカオ畑の拡大に安くて良質なバカの労働力はとても重要である（北西 2019）。第 3 章で紹介したソン村の 9 年間の変化を見るだけでも、強制的な政策がない限り、農耕民たちは定住化後でもめったに移住しない。その代わりに村内のバカの労働力が不足する場合は、他の村ないし他の地域のバカを呼んで働いてもらう（事例⑧、⑯）。つまり、農耕民の生活に起きた変化は、彼らとバカの関係を通して、バカの移動にも影響を与えたのである。

また、外部者の増加によってバカの通婚範囲が拡大されたことも顕著に見られた。個人の事例でカメルーンのバカ全体まで一般化できないが、ソン村の若い女性たちの結婚相手や婚姻・居住状態の事例からうかがえる。バカ社会における婚姻の集団内規制が柔軟的なもので、他集団の人との結婚に対する年長者たちの反対は 2010 年より徐々に弱くなった傾向も事例④の記述から窺える。このように、10 代・20 代のバカ女性たちに見られた農耕民や外部から来た労働者との交際は過去において周りから強く反対されることから、正式な結婚としてバカからも周りの農耕民や外部者からも認められる正式な結婚に徐々に変わっている。バカ社会の集団内規制も、同地域他集団を含む地域全体においても、前述の集団間の相互作用によって各集団におけるそれぞれの社会制度にも相応する変化が見られた。そうした社会制度の変化がもたらしたのは、女性を通じたバカの通婚範囲の拡大と生業生産活動を行う空間的範囲の拡大で、結果的に彼らの居住と移動という行

為と範囲に影響を与えた。このような一連の変化および変化がもたらした移動と移住は、世代を超える十数年以上の期間でようやく徐々に見えるようになる。それは中長期において、現在のバカにみられる居住と移動のパターンに特徴づける社会的要因であろう。

7 結論

本稿では、カメルーンのバカの定住化過程を整理したうえで、バカたちの居住・移動と移住について個人の移住事例を挙げてきた。そして、それらの事例に基づき、彼らの移動と移住に関わる社会的要因を、集団内と集団外という2つの側面から議論した。その結果、筆者のフィールドワークでわかった定住化後のバカ社会では、集団内においては居住・移動と移住に彼ら自身の社会的規範、すなわち親族システムと婚姻制度というものが強く機能しており、主要な要因となっている一方で、農地や活動範囲が拡大された農耕民との関係や、新たな他集団との接触という集団間の相互作用は、彼らの移動の新たな要因として現れた。バカたちが、外部者との接触を拒絶するのではなく、柔軟に受け入れてそれらを利用していることは、外部者を介した彼らの移動が顕在化されたという点からもわかる。それに、接触する他集団の人々が増えるにつれて、同地域に居住する成員の構成は過去の「バカと特定の農耕民族」という二分化から、ポスト狩猟採集民・複数の農耕民族・伐採労働者などの多様化に至った。その中でバカ女性に見られる他集団の人と正式な結婚が増え、女性を通じた他集団との交流も正当化されたと考えられる。定住化後は、狩猟採集のための遊動は減ったかもしれない（安岡2011）が、集団内での居住と移動・移住には親族システムが規範として働き続けている。また、他集団との通婚に関する集団内の規制が緩められ、バカと複数の他集団との交流が拡大され、それによる移動の範囲も拡大される。

狩猟採集民の移動性に関する先行研究では、長期的なタイムスパンにおいて生態学的・経済的な視点によって生態的な要因（自然資源）が強調されてきた（例：Kelly 2013）。それに対して、これまでの民族誌は「ある時点のある場所」というところに注力し、文化や社会に関わる分析は、親族システムと照らし合わせての構造的な研究が多かった（ピグミーの場合は、例えば Bahuchet 1985 や Terashima

1985)。現在、カメルーンのバカたちが経験する定住化や他集団の増加などの社会的環境の変化は、アフリカ南部のブッシュマンやインドのナヤカなどの狩猟採集民たちも同時代的に経験している (Ikeya 2018; Bird-David 2018)。カメルーンのバカの事例からわかったのは、1つの民族集団・文化集団の居住と移動は自然環境に応じて行われる生業活動や、集団内部の構造的な社会的規範のみが影響要因ではなく、集団間の相互作用およびそれによって生じた集団内規範の変化も考慮すべき重要な要因ということである。

本稿で示したように、集団間の相互作用がもたらした影響は、とりわけ中長期間において顕著になってくる。すなわち、短期間に見られた社会的要因を積み重ねて検討していくと、集団における社会制度の変化または維持、それに加えて他の集団との接触および相互作用によって生じる変化の蓄積が、中長期間の移動への主要なインパクトとして位置づけできるのである。

謝 辞

本稿を執筆するためのデータ収集はそれぞれ以下の資金のサポートによって実施された：(1) 京都大学臨地研究支援センター国際・トレーニング・プログラム (2010 年の調査)、(2) JSPS 科研費 JP22101003 (2011 ~ 2014 年の調査)、(3) JSPS 科研費 JP16H06411 (2017 年の調査)、(4) JSPS 科研費 JP18K12611 (2018 ~ 2019 年の調査)。本稿は上記の(3)と(4)の成果の一部である。

注

- 1) コミュニティ・フォレストは、カメルーンにおける森林を管理するために地域住民の間で結ばれた組織である。
- 2) ククマの職能や機能については、ククマに行政上の権力を持たせたり (園田浩司 私信)、そうでなかったりして、地域によって解釈が異なる。調査対象の新旧ンガト地域でも、各集落のククマの職能・機能は集落によって異なり、また時間的に変化も起きている。本稿ではククマの職能や人々の地位、身分などより、集落の構成と人々のつながりに重きを置いているため、ククマの職能・機能について詳しく記述・議論しない。
- 3) △は男性を示す、○は女性を示す。▲はククマという人物を示すためのものである。

参考文献

〈日本語〉

北西功一

2002 「中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容」『山口大学教育学部研究論叢』52(1): 51–69。

2003 「カメルーン南東部の狩猟採集民バカにおける貨幣経済の浸透」『山口大学教育学部研究論叢』53(1): 51–65。

2019 「カメルーン東南部の熱帯雨林地域に居住するバカの 2000 年代における土地利用の変化——カカオ栽培と移住者の影響から」『山口大学教育学部研究論叢』68: 249–261。

服部志帆

2010 「森の民バカを取り巻く現代的問題——変わりゆく生活と揺れる民族関係」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌——アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』pp. 179–206, 京都: 京都大学学術出版会。

2012 『森と人の共存への挑戦——カメルーンの熱帯雨林保護と狩猟採集民の生活・文化の両立に関する研究』京都: 松香堂書店。

松浦直毅

2012 『現代の「森の民」——中部アフリカ, バボンゴ・ピグミーの民族誌』京都: 昭和堂。

安岡宏和

2011 『バカ・ピグミーの生態人類学——アフリカ熱帯雨林の狩猟採集生活の再検討』京都: 松香堂書店。

〈外国語〉

Althabe, G.

1965 Changements sociaux chez Pygmées Baka de l'est Cameroun. *Cahiers d'Etudes Africaines* 5(20): 561–592.

Bahuchet, S.

1985 *Les Pygmées Aka et La Forêt Centrafricaine: Ethnologie écologique*. Paris: SELAF.

1993 History of the inhabitants of the Central Africa rainforest: Perspectives from comparative linguistics. *Tropical Forest: People and Food*, pp. 37–54. London: Parthenon Publishing Group.

Bird-David, N.

2018 *Us, Relatives: Scaling and Plural Life in a Forager World*. Orkland, CA: University of California Press.

Kelly, R.

2013 *The Lifeways of Hunter-Gatherers: The Foraging Spectrum*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hewlett, B., J. M. H. van de Koppel, and L. L. Cavalli-Sforza

1982 Exploration Ranges of Aka Pygmies of the Central African Republic. *Man* 17(3): 418–430.

Hirai, M.

2014 Agricultural land use, collection and sales of non-timber forest products in the agroforest zone in southeastern Cameroon. *African Study Monographs. Supplementary issue* 49: 169–202.

Ikeya, K.

2018 Settlement Patterns and Sedentarization among the San in the Central Kalahari (1930–1996). In R. Fleming Puckett and K. Ikeya (eds.) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates* (Senri Ethnological Studies 99), pp. 177–196. Osaka: National Museum of Ethnology.

MacDonald, D. and B. Hewlett

1999 Reproductive Interests and Forager Mobility. *Current Anthropology* 40(4): 501–524.

彭 個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態

Njounan Tegomo, O., L. Defo, and L. Usongo

- 2012 Mapping of resource use area by the Baka Pygmies inside and around Boumba-Bek National Park in Southeast Cameroon, with Special Reference to Baka's Customary Rights. *African Study Monographs. Supplementary issue* 43: 45–59.

Sato, H.

- 1992 Notes on the Distribution and Settlement Pattern of Hunter-Gatherers in Northwestern Congo. *African Study Monographs* 13(4): 203–216.

Terashima, H.

- 1985 Variation and Composition Principles of the Residence Group (Band) of the Mbuti Pygmies—beyond a Typical/Atypical Dichotomy. *African Study Monographs. Supplementary issue* 4: 103–120.